ふるさと再発見！

ほうぼわかやま

HOUBO WAKAYAMA

vol. 5

FREE

巻頭特集

地名を語る、地名が語る。

雑学とタイムスリップの世界へ。今、地名が面白い。

●紀州の歴史・文化
和歌山の民芸紙
保田紙から見る笠松左太夫

●散策
ノスタルジック探訪
～和歌山市駅から、紀伊中ノ島駅～

●施設紹介
・真田庵を訪ねて
・シリーズ道の駅
「San Pin 中津」

地名を語る、地名が語る。

私たちの身近に空気のように存在し、
何気なく使っている地名。
そんな地名を調べていくと、地名の方から
私たちの故郷の歴史や文化を
語りかけてくるような気がする。

木国(きのくに)から、紀伊国(きのくに)へ

「きのくに」の歴史は古く、古事記・日本書紀にもその名が見られるが、古事記では「木国」と表記されている。地理的に都に近く、良質な木が豊富に採れたため、材木を都に献上していたことがその名の起こりだといわれる。ところが奈良時代に入り、「地名は良き字二文字で表すように」と朝廷から命令が下る。そのため一文字の「木」を二文字にする必要があった。そこで母音を重ね「キ」を「キイ」とした。しかも良き字ということで紀元などモノの始まり、時代を作るといった意味の「紀」に母音の「伊」を足して「紀伊国(きいのくに)」となった。

こうして生まれた「紀伊国」だが、人々からどう読まれていたのか。中世になると平仮名で手紙を書く人が出てくるが、それによると「きのくに」と書かれている。「木国」から「紀伊国」に変わったが、読み方はそのまま受け継がれたようである。

紀南には「熊野国」と呼ばれる地域があった。しかし、大化の改新の折に「紀伊国」に編入されてしまった。「熊野国」は紀伊国牟呂郡となり、後に東西南北に分断され北・南牟婁郡は三重県に、東・西牟婁郡は和歌山県に編入されることとなる。

熊野という地名は、今では熊野大社・熊野川そして熊野古道といった名称にその名残を見ることができる。

●和歌山城

●蓬莱岩を臨む和歌浦の風景

雑学とタイムスリップの世界へ

そして、和歌山へ

「和歌山」という地名が最初に登場するのは天正13年（1585）のこと。当時、今の和歌山市を含む紀ノ川河口部一帯は「雑賀」と呼ばれていたが、羽柴秀吉が雑賀攻めを行ったとき「ここに『和歌山』の城を築きたい」という手紙を送ったのが始まりとされている。

それではなぜ「雑賀」の土地に「和歌山」という名をつけようとしたのか。

当時、和歌山で最も有名な地名は万葉集などの和歌に詠われている「和歌浦」である。都の人々や公家にとって「和歌浦」は憧れの地でもあった。

その「和歌浦」から地続きの山の上に城を築くこと、それを広く知らしめるため、天下人の秀吉は「和歌山」という名前を付けたのではないかといわれている。

もともとあった「雑賀」という地名は和歌山城を中心に城下町が大きく広がるにつれ、新しい町名が付けられ、今では旧城下町周辺に「雑賀崎」が残っている。

司馬遼太郎の著書『尻啖え孫市』では、雑賀孫一の居城は雑賀崎にあるとされるが、雑賀の残る地名が「雑賀崎」くらいしか見つからなかったからではないかと推測される。

一方「和歌山」という名前だが、当初は「和歌山」と「若山」が混在して使われていた。しかし元禄年中（1688～1704）に一度「若山」と統一されたという。

「和歌山」の名前は明治に入り「紀州藩」が「和歌山藩」として復活する。

その後、廃藩置県が行われ「紀伊国」は「和歌山」となるのである。

ちょっと気になる 雑学 和歌山市内の地名たち

まずは、おなじみの地名から

【おおた】太田　『紀伊続風土記』によると広い田があったから。その証拠に県下最大の弥生の農耕集落跡が地下に発見されている。
　奈良時代の始めに編修された『播磨国風土記』によると播磨国揖保郡太田の郷の地名は、もともと紀伊国太田村に住んでいた韓国からの渡来人が、摂津国に渡り、その後揖保郡に渡ったときに、それぞれの土地に太田の名前をつけたとされている。

【かだ】加太　本来「カタ」と読む字が「カダ」と濁る。逆に雑賀は「サイガ」と読む字が「サイカ」と濁らない。これは紀州弁の特徴。干潟の潟（かた）から字を当て加太としたのが濁り「カダ」になった。

【さかえだに】栄谷　昔は境井谷と記していた。記録から海部郡と名草郡の境を示す地名として名付けられたのではないかとみられる。しかし、「境界」という意味より「栄える」の方がいいだろうということから栄谷となった。

【ほりどめ】堀止　城下の南を区切るため和歌川から堀を掘っていたが、堀を作ることが幕府への反逆とみられるため、堀を作るのを止めた。そこから名付けられたとされている。また、浅野家から徳川家に代わり三十七万石の城下町が五十五万石まで広がると、境界として堀を作る必要がなくなったため堀を作るのを止めたともいわれる。

●江戸時代の堀止付近

●現代の堀止付近

人名由来の地名

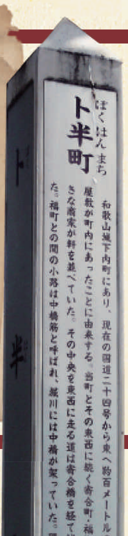
【ありだやちょう】有田屋町
江戸初期の豪商、有田屋新九郎の屋敷があった。有田屋新九郎は貞享4年、現在の海南市に有田屋塩田を開発した。その功として拝領したのが由来だ。

【いんべ】井辺　工匠の神とされる彦狭知命を祖とする紀伊忌部氏から。忌部氏は造殿港湾工事などの技術集団でもあり、初期大和政権発展に貢献したと伝えられている。

【きたじんごべえちょう】
北甚五兵衛丁
【みなみじんごべえちょう】
南甚五兵衛丁　御弓頭衆の芦川甚五兵衛（千五百石）の預り御弓同心50人の組屋敷があった。
　「七曲り」という地名は道路が屈曲していることに由来する地名だが、北甚五兵衛丁と南甚五兵衛丁の間の道路は「文久城下町図」に「四曲り」と記されている。

【さいかやちょう】雑賀屋町
板問屋・回船問屋などを手広く営んだ豪商雑賀屋長兵衛は小豆島に雑賀屋新田を開き、その功によって拝領した。

【ぼくはんまち】卜半町　「紀伊続風土記」によると「泉州貝塚卜半といふ者所持の家あり、よって名づく」とある。本願寺の貝塚御坊の住職は代々「卜半」を称し、鷺森別院参詣の折の屋敷があったとされている。



●卜半町の由来を記した碑

地名の豆知識

「町」と「丁」

　和歌山市旧城下町の地名を見てみると「町」と「丁」の二つが使い分けられているのに気づく。
　一般に「○○町」というのは商人・職人の町、「○○丁」というのは武家の町といわれているが「毛革屋丁」のように職業由来の地名に「丁」が使われている例もあり、厳密に区別されているわけではないらしい。
　なお、「町」と「丁」を使い分けている都市として他に仙台市がある。

難読地名

いくつ読めますか?

※答えは下にあります。

①永穂　郷名に断金という郷があり「むつまし」と呼んでいたが、のちに字音から「だんごん」となり、さらに「なごふ」と訛り「永穂」の字を当てたとされている。

②小豆島　小豆は崩岸（あず）の借字。崩岸とは「がけ」のこと。

③新内　古くは「安楽内」「荒内」とも書いた。地名は新地を意味するとされる。

④岩橋　由来は紀ノ川より耕地の用水を引いた宮川に架ける橋を湯橋と呼んだことから。

⑤四箇郷　明治22年、松島・加納・有本・新在家の四ヵ村が合併して出来た地名。

⑥吐前　古くは埴埼（はにざき）とも羽崎とも記され転訛し「吐前」になったとされる。

地形由来の地名

【かんどり】梶取　昔、紀ノ川が大きく湾曲して和歌川に流れていたころ、船着き場があり海からの船と川を上る船とを乗り換えたことから、梶を取る→梶取になったといわれている。

また、「明屋帳写」によると次郎丸という船の梶が流れ着いたためともいわれている。

【じろまる】次郎丸　古代は紀ノ川の中にあり、中世の名田が名前の由来とされる。名田（みょうでん）とは税をかけるとき、田畑の所有者を明確にするために、その土地に名前をつけること。多くは所有者の名前がそのまま採用された。

【うじてっぽうば】宇治鉄砲場　「宇治」は「内」を意味し、本来は紀ノ川河口部の中島のこととされる。江戸時代には藩の鉄砲の練習場があり、民家はほとんどなく町民や下級武士の田畑が若干あった。

東の名草浜の入海と西の和歌浦入海の内に当たる「宇須」も同じ意味からきた地名だ。

【きつねじま】狐島　紀ノ川は西に直通して、河口が大きく開いていたころ、河口部にあった中州の一つで、形が狐に似ていたことによると伝えられている。また、土入川沿いの地域を島橋というが、このころ松江村と結ぶ橋の名称にちなんだものである。

人とともに動き、生まれ消えていく地名

和歌山の地名を調査してみて驚いたのは、その資料の少なさである。

現存する資料では江戸時代に編修された「紀伊続風土記」がもっとも古く、それ以前の記録は他の書物から読み取るしかない。江戸時代には、和歌山藩の右筆（書記）が書きとめた３０００以上の公的記録があった。

しかし、明治５年に「虫に食われ、写しかえる費用がないため」と処分されてしまった。また駿河町の土地台帳などの記録が和歌祭の提灯代を工面するために売り払われたりといった経緯もある。このように古い地名ほど由来は定かではなく、伝聞や推測によるところが大きい。しかし「地名」はある日突然できるものではなく、その由来には必ず意味がある。

例えば、江戸時代の商人町は「同職同住」といい、区画ごとに決められた職人や商人が集められた。そうすることで、互いに競争させ良い物を作らせ、また管理するのに都合がよかったからだ。こうした名残が桶屋町・鍛冶町・大工町などの地名だ。その後、時代の変化とともに町民が互いを行き来し、混在するようになり、地名どおりの商いをすることも少なくなった。だが、その地名があることで、かつての姿を思い描くことができる。

大きくなったり小さくなったり、人とともに動き、生まれ、消えていく地名。その流れを追うことは、かつての文化・風土・慣習を知る手がかりにもなるのではないだろうか。

どんな由来で今の地名がついているのか、調べてみると必ず物語があるはずだ。（特集編集班：西上）

■参考図書：「城下町和歌山百話」　三尾 功 氏 著
「角川日本地名大辞典 30 和歌山」　地名編纂委員会 編
「日本歴史地名大系 和歌山県の地名」　平凡社

■取材協力：和歌山市立博物館館長　寺西 貞弘 氏
和歌山大学 教育学部 社会科教育 教授　水田 義一 氏

難読地名の答え　①なんご　②あずしま　③あろち　④いわせ　⑤しかご　⑥はんざき

有田郡有田川町清水

和歌山の民芸紙

保田（やすだ）紙（がみ）から見る笠松（かさまつ）左太夫（さだゆう）

清水に伝わる手すきの紙、その温かで情緒深い風合いの裏には、地域のために尽力をつくした偉大な人物の物語があった。

紀州手すき和紙　保田紙

有田川町清水には今も手すき作業で作られる和紙「保田紙」がある。約400年も前から伝えられてきたこの和紙は、塵（ちり）をきれいに取り除いた楮（こうぞ）の繊維と黄蜀葵（とろろあおい）の糊、そして清水の真水から作られる。それらを混ぜ合わせたものが、すき舟を使った手作業で一枚一枚保田紙となっていく。

大きさや種類によって異なるが、1人で1日約100枚の紙をすく。楮の繊維がしっかり絡み合い、丈夫でしっとりとした手触りだ。すき加減で紙厚が調節され、書画用紙、一筆箋、うちわ、障子紙などに使われる。昔は番傘に使われることが多かったため、傘紙とも言われていた。

大正から昭和初期にかけて最も栄えたころは約400軒もの紙すき屋があった。しかし、機械すきや海外産の和紙が普及したため、清水の紙すき屋は一軒もなくなってしまった。今では清水高齢者生産活動センターが紙すき技術を守り伝えている。

この保田紙、江戸時代に清水の手工業の一つとして取り入れられた裏には、地域活性化という大事業を成し遂げた、ある名士の奇策妙計があった。

清水高齢者生産活動センター

保田紙の紙すき体験の他に、うちわやぞうり作り体験も可能な施設。高齢者の生産活動の場としても機能している。体験の予約は一週間前までに電話にて受付。費用は400～700円。

・お問い合わせ先・

〒643-0521 和歌山県有田郡有田川町清水1225番地
TEL：0737-25-0621　　定休日：水曜・木曜・祝日

白藤　勝俊氏

清水高齢者生産活動センター事務長よりお話を伺った。

「楮(こうぞ)の塵(ちり)より」紙のきれいさは、この手作業で決まる。

大庄屋 笠松左太夫と保田紙

元和5年（1619）、紀州徳川の初代藩主徳川頼宣(よりのぶ)公がお国入りした。そのとき領内には『三白』と言われる重要な産物（米・塩・紙）のうち、製紙業が皆無だった。この産業興しを清水の大庄屋、笠松左太夫に命じたのである。

左太夫は次男を連れ、吉野へ紙すき技術を教わりに出かける。しかし、その当時、よそ者には土地の特産物となる技術は容易に教えてもらえず、見学すらさせてもらえなかったという。

清水に戻った左太夫は、思案の末ある奇策を思いつく。

まず、村の若者を集めて酒盛りをし、その中で美男で芸達者な3人を選んだ。そして、商人に仕立て、紙すきの盛んな地へ送り込んだのである。3人はそれぞれよく働き、土地の人にも信頼された。こうして左太夫は3人の男たちに、紙すきの上手な嫁を見つけて清水へ連れ帰ってこさせたのである。

最初は気候や土質の違いがあったためよい紙がすけなかったが、3夫婦と左太夫は工夫を重ね、良質な紙をすくことに成功した。できあがった紙を献上したところ、殿様に大変喜ばれたという。それから代々、清水の保田紙は、嫁の手から手へ受け継がれてきた。

清水 あらぎ島

あらぎ島

保田紙以外にも左太夫の偉業として伝えられているものがある。今では清水のシンボルとなっている「あらぎ島」をはじめ、多くの新田や用水路の開拓だ。

左太夫の特筆すべき点は、大庄屋という立場を私利私欲を満たすために使うのではなく、村を発展させ、農民の生活を良くするために活用したことだ。

こういう話が残っている。水田や用水路を開拓するにあたり、農民たちが岩肌を削った代価として岩の粉一升と米一升を交換したという。

その偉業を村民が畏敬(いけい)の念を込めて歌として伝え続けている。

三田の左太夫は鬼かよ蛇かよ
鳥も通わぬべんてん山に
らんかづくりで水をとる
らんかづくりで水をとる

私欲に溺れず、村のために私財を投げ打った左太夫は、自身の肖像画や資料を残さず人生を終える。しかし、左太夫の偉業は今でも色あせることなく、村人の心の中に生き続けている。

笠松左太夫の記念碑

江戸時代に描かれた清水の紙すき風景（紀伊国名所図会）

⑩ JR 紀伊中ノ島駅
《1935（昭和10）年建設》
モダンな斜め格子の駅舎。
旧 官営八幡製鉄所で操業当初（100年以上も昔）に製造された古いレールが、ホームの屋根を支えている柱や梁に使用されている。推薦産業遺産（産業考古学会）。

⑧南海本線 紀ノ川橋梁 《上り線 1903（明治 36）・下り線 1922（大正 11）建設》
南海本線の複線化に伴い、下り線が建設された。上下線で橋脚やトラスの形状が異なっている。近代化産業遺産（経済産業省）。

ノスタルジック探訪
～和歌山市駅から紀伊中ノ島駅～

「古い建物がない町は、記憶がない人間と同じ」という言葉があるように、すべてが新しい建物で埋め尽くされた都市は味気ない。
しかし、この和歌山市内にも、明治・大正・昭和初期の古い建物がたくさん残っている。そんなノスタルジックな場所を求めて、町の記憶に逢いに出かけた。

移ろいゆく時の流れの中で、古い建物が壊され、町は少しずつ塗り替えられていく。普段は通り過ぎている何気ない景色の中に、歴史を刻みながら今もなお、現役で活躍する魅力的な建造物がある。今回ご紹介するのは、どこか懐かしい町の記憶を訪ねるコース。

まずは南海和歌山市駅から南東に城北橋北詰へ向かう。そこから市堀川遊歩道に下り、川の流れなどを眺めながら進むと、鉄道から転用された**中橋**がある。橋を渡って、南側の河岸を江戸時代の賑わいに思いを馳せながら歩く。

城北橋南詰でいったん車道に上り、再び遊歩道へ。道すがら見上げると、古い石垣の上にコンクリートのビルが建っている。

寄合橋からは車道に出て、西へ約３００ｍ行くと六叉路がある。南西に延びる道の先に、存在感のある**西本ビル**の雄姿をとらえた。

西本ビルからは北大通りへ出て堤防へ向かい、潮風を感じながら**河西橋**へ向かう。

かつて海水浴客が列車を手で押しあげたという急勾配を下り、駅裏の細道を通り第一踏切へ。

60～70年代を忍ばせる小さな歓楽街を抜けて、高架をくぐって進むと**赤煉瓦倉庫**の壁が見える。煉瓦塀づたいに**人道トンネル**へ進み、南海本線**紀ノ川橋梁**へ。旧大和街道を通って**JR紀伊中ノ島駅**までの約5.5kmの道のり。

⑨阪和駅前バス停留所
阪和電気鉄道の阪和中ノ島駅があった名残が、停留所の名前として存在している。

⑦人道トンネル《1922（大正 11）建設》

和歌山市駅から紀ノ川に至る南海電鉄の土手下をくぐるトンネル。南海本線の複線化に伴い、人・馬用に造られた。

⑥紀ノ川倉庫《1919（大正 8）建設》

旧紀ノ川紡績の工場として建設されたもの。赤煉瓦の色合いが歴史を感じさせる。競輪場の敷地に沿って赤煉瓦の塀が続いている。

⑤河西橋《1914（大正3）建設》

旧加太軽便鉄道の紀ノ川橋梁として建設。1966（昭和 41）年に加太支線が廃止。その後、人道橋として生まれ変わる。台風による損傷で傾いた橋脚も補強され、今なお現役だ。

④旧西本組本社ビル（小野町デパート）《1927（昭和2）建設》

市街地にありながら、戦災を免れた古い趣のある建物。現在は、カフェやイベントスペースとして活用されている。登録有形文化財（文化庁）。

①市堀川遊歩道（開放時間9:00〜17:00）

和歌山城の外堀で舟運ルートとして利用されてきた市堀川。現在は、川沿いに遊歩道がつくられている。

③寄合橋《1941（昭和16）建設》

江戸時代からの由緒ある橋。現在の橋は昭和16 年製。戦災では、多くの市民の命を救った。橋の両端には常夜灯が灯されていた。

タイムスリップ！江戸情緒

紀州青石

遊歩道からは、元々の河岸の名残である古い石垣を間近に見ることが出来る。

紀州青石と呼ばれる緑泥片岩で、緑色が美しく水に濡れると一段と鮮やかさを増す。

嘉家作丁の町並み

堤防の斜面を利用して、表は道路、裏は堤防で低くなっている「懸け造り」という独特の建築様式。また各家は参勤交代の際に藩士たちの休憩のために軒先を深く出し、「一文字の軒」と称されるように高さが統一されていた。

うりふたつ

⑪新興橋《1954（昭和29）移設》

②中橋《1898（明治 31）製→1953（昭和 28）移設》

明治時代に東海道線の京都桂川に架かっていた鉄道用橋が、徳島県勝浦川に架かった後に、戦後に現在の場所に移設転用されたもの。コースからは少し外れるが、同じルーツをたどる橋がある。水道道を南下した大門川に架かる新興橋だ。その様相はまるで兄弟のよう。いずれも製造から 100 年以上たっていながら、現役で活躍している。

真田庵を訪ねて

真田幸村ゆかりの地　伽羅陀山 善名称院

「かくれ住んで 花に真田が 謡かな」
「炬燵して 語れ真田が 冬の陣」
武家屋敷のような城郭風の本堂を持つ尼寺善名称院。
俳人、与謝蕪村もここを訪れ句を詠んだ。

高野山の麓、和歌山県伊都郡九度山町にある真田庵は、正式名称は善名称院という。慶長5年（1600年）9月、関ヶ原の合戦の後、真田昌幸・幸村父子が隠棲していた屋敷跡で、和歌山県の史跡に指定されている。大安上人が真田昌幸の墓所に本尊の地蔵菩薩を安置し、真田昌幸・幸村・大助の三代の御霊をまつりこの寺の守護神とした。

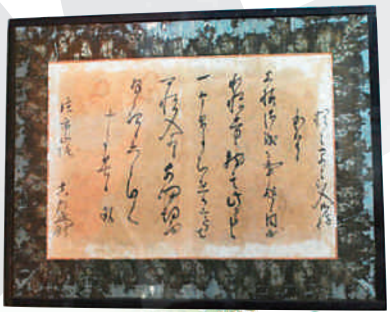
真田庵は城郭風の八棟造の本堂や真田家の家紋である六紋銭が施された瓦や門がある。一見武家屋敷のような重厚さがあり、ここがお寺であることを忘れさせる。

併設された宝物資料館には、真田幸村が実際に使ったといわれる十文字の槍先や甲冑、直筆の書など戦国ファンにはたまらない逸品がたくさん展示されている。一歩足を踏みいれると戦国時代へタイムスリップできそうな真田庵を一度訪ねてみては。

真田 昌幸
【1547年〜1611年】
真田幸隆の三男として生まれる。
智謀を駆使して戦国時代を生き抜き、豊臣秀吉からは「表裏比興の者」と評されていた。
関ヶ原の戦いで西軍が敗れた後、幸村とともに九度山に流され、そこで生涯を終える。

幸村公が使用したと伝えられている槍先

瓦六文銭


幸村公の書

【所在地】和歌山県伊都郡九度山町九度山 1413
【休館】なし　【公開時間】9:00 〜 17:00
【料金】宝物館は 200 円
【お問い合わせ】0736-54-2218
【アクセス】南海電気鉄道高野線九度山駅→徒歩 10 分

真田幸村と九度山

大坂の陣で「真田 日の本一の兵 古よりの物語にもこれなき由」と称えられるほど活躍した猛将、真田左衛門佐信繁（幸村）。関ヶ原の合戦後から大坂入城までの約14年間を高野山の麓、九度山で蟄居生活を送っていた。

九度山の蟄居生活へ

天下分け目の関ヶ原の戦いで西軍側についた真田昌幸、幸村親子は、石田三成率いる西軍が敗れたことにより、敗軍の将となる。処刑となってもおかしくなかったが、東軍側についていた幸村の兄信之とその義父本多忠勝の助命嘆願により流罪となった。当初は高野山への配流が予定されていたが、幸村は妻子を連れていたので当時女人禁制であった高野山に入れず、麓の九度山にて蟄居生活を送ることとなった。

侘しい九度山での生活

大名時代の優雅な生活水準を保っていた九度山での生活は、金銭面で大変苦しいものだった。生活費の多くは兄の信之や家臣からの仕送りに頼っていたが、それだけでは足りず、従者は日々金策に走りまわっていた。現存する手紙からは、親戚にお金を無心したり、家臣に焼酎をねだったりと、猛将のイメージとはかけ離れた幸村がみうけられ、身近に感じることができる。生活費の足しにと昌幸、幸村の家族が織っていた紐が堺の商人を通じて全国に販売され「真田紐」として好評を得ることとなる。

昌幸が失意のうちに死去すると、幸村は赦免されることに望みを抱く。しかし、徳川家から許されることは無く、50歳手前になった幸村は、厳しい九度山の生活と老いを感じ始めたことで、絶望と侘しさを感じていた。

九度山からの脱出

徳川家と豊臣家の対立が深まり、豊臣秀頼から招聘があった幸村は、このまま老いて朽ち果てるよりは活躍する場を求め、大坂へ向かうことを決意する。

幸村を要注意人物とみていた徳川方は警戒し、見張り役である真田屋敷の周辺村人に幸村が大坂に向かわないよう注意を促した。しかし一計を案じた幸村は村人を集め、日ごろのお礼として酒宴をもうけた。全員が酔いつぶれたのを見計らい、九度山を無事脱出。大坂へ向かったという逸話がある。長年の間、幸村とふれあってきた村人も騙されたふりをして黙認したという説も残っており、元々豊臣恩顧の大名であった紀州藩主浅野長晟も、村人を咎めることなく、追手を差向けることもなかったという。

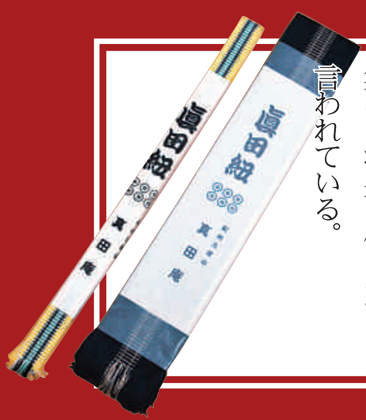
その後の活躍ぶりは有名なところだが、九度山での生活がなければ猛将真田幸村は生まれなかっただろう。

真田 幸村（本名：信繁）
【1567年～1615年】

真田紐

信州上田地方に伝わる真田の織り技を応用した平たい木綿の紐で、伸び縮みせず、その丈夫さから刀の下げ緒や茶道具の箱紐などに幅広く利用された。堺の商人を通じて全国に売られ、各地で「真田の紐は丈夫」と好評を得たことから真田紐の名が定着したと言われている。

また言い伝えでは、九度山に蟄居中の昌幸、幸村親子は従者や家族に農耕作業の傍らこの紐を作らせ、行商をさせながら諸国の動静などの情報を集め、将来に備えたとも言われている。



和歌山県の道の駅を巡る

シリーズ 道の駅①

山里ならではの特産品が魅力的

―San Pin 中津―

日高川町は紀州備長炭生産量の日本一を誇る。売店ではその紀州備長炭をいかした観賞用備長炭や木酢液に人気があり、山里ならではの椎茸や鮎、あまごも販売している。また特産物であるホロホロ鳥の冷凍肉をはじめ、特徴ある水玉模様の羽をあしらったコサージュなど、ここでしか手に入らない逸品も魅力的だ。

併設された「お食事ほろほろ亭」では、ホロホロ丼やホロホロラーメン、焼き鳥など、こくがありジューシーなホロホロ鳥の肉をその場で味わうことができる。

「地元でとれる農作物も人気がありますよ～」と気さくなスタッフが迎えてくれる。

観賞用備長炭

木酢液

San Pin 中津（さんぴんなかつ）

【所在地】和歌山県日高郡日高川町大字船津820番地
【休館日】12月31日午後～1月2日午前中まで
【開設時間】4月～9月　午前8時～午後6時30分
3・10月　午前8時～午後6時
11月～2月　午前8時～午後5時30分
【お問い合わせ】TEL 0738-54-0541
FAX 0738-54-0177
【アクセス】湯浅御坊道路川辺ICから県道玄子小松原線・町道三百瀬中津川線経由県道御坊美山線を龍神方面へ10分（大阪から2時間）
JR紀勢本線御坊駅から車で20分

クイズとアンケートで当たる！

クイズにお答え頂いた方の中から抽選で「保田紙 封筒便箋セット」を10名様にプレゼント!!

問題 真田昌幸・幸村家族が蟄居生活の間、生活費の足しにと作っていたものは何でしょうか？

①保田紙　②ホロホロ丼　③真田紐

※ヒント：本号のどこかに答えが載っています。

応募要項
官製ハガキ、又はメールにて ①住所 ②氏名 ③年齢 ④性別 ⑤クイズの答え ⑥小誌のご意見・ご感想 を必ずご記入の上、下記へふるってご応募ください。
1次〆切:2010年9月末日(当選人数／5名様) 2次〆切:2010年10月末日(当選人数／5名様)

■ハガキ：〒640-8464 和歌山市市小路153-1 紀ノ川ビル2F ㈱ウイング「ほうぼ・クイズ&プレゼント係」
■メール：mail@w-i-n-g.jp

提供:清水高齢者生産活動センター（封筒10枚入 便箋30枚入）

編 集 後 記

第５号の「ほうぼ」はいかがだったでしょうか？ これまでの号と少し違いが感じられましたでしょうか？ 実は、編集メンバーが大きく入れ替わりました。人がかわると誌面も変わります。読者のみなさんは何かお気づきになられましたか？ 編集後記の上欄にある「クイズ」にご応募頂き、お読みになった感想・ご意見を、ぜひお聞かせ下さいね。

さて、今回の特集（2～5ページ）では、主に和歌山市の「地名」について調べてみました。誌面を作成していると、その地名の場所の昔の様子に思いを馳せずにはいられませんでした。読者のみなさんのお住まいの地域をすべて紹介することができないのはとても残念ですが、これを機会に、ふだん何気なく使っている地名の「時間的な縦軸」に目を向けて、身近な郷土の歴史を感じて頂ければうれしいです。

歴史コーナー（6、7ページ）は、清水の「保田紙」とその由来についてのお話ですが、また一人、和歌山の知られざる素晴らしい人物を紹介できたように思います。散策コーナーでは和歌山市内の近代建物めぐり、情報コーナーでは九度山町の真田幸村を、また、和歌山県内の「道の駅」を新しいシリーズとして最終ページで紹介しています。楽しくお読み頂ければ幸いです。

第５号編集長　岡　京子

株式会社ウイング
印刷から、新しい価値の創造を。

株式会社ウイング／印刷物の企画・デザイン・製造を主体とし、出版サービスや印刷付帯サービス、さらにデジタルメディアなどの活用を視野に入れた「新しい印刷業」を目指している企業です。おかげさまで 2010 年６月、弊社は設立 30 周年を迎えました。
［沿革］創業 1972 年。設立 1981 年。2005 年に中央印刷株式会社から株式会社ウイングに社名変更。本社、和歌山市梶取。従業員 58 名。

皆さまに支えていただきましたことに感謝の気持ちを込めまして「30 周年感謝還元キャンペーン」を実施しております。
詳しくはウェブで検索→ http://w-i-n-g.jp　ウイング 和歌山　検索　お問い合わせ先 0120-13-6700

ほうぼ 第5号
2010年7月23日　発行人／松田好司　編集人／岡京子　発行／株式会社ウイング
本社　〒640-8411 和歌山県和歌山市梶取17-2　TEL.073-453-5700／FAX.073-453-5522
E-mail：mail@w-i-n-g.jp　http://w-i-n-g.jp